

# 『インクルージョン保育のためのグループ指導カリキュラム』 の保育所での活用—その適用可能性の検討—

○南 博  
(みなみ栄保育園)

清水直治  
(日本体育大学体育学部特別支援教育)

土橋とも子  
(認定 NPO 法人日本ポーターズ協会)

福本みどり

KEY WORDS: インクルージョン保育、遊びユニット、多層水準指導

## (目的)

認定 NPO 法人日本ポーターズ協会は、2005(平成 17 年)年に『インクルージョン保育を展開するための幼児・グループ指導カリキュラム—「遊び単元」中心の多層水準指導—』を作成し、保育所や幼稚園などのグループ指導において、障害のある子どもや発達に遅れや偏りのある子どもが共にいるインクルージョン保育の集団活動において適用できるように、その普及を目指してきた。その後すでに 10 年以上が経過し、この間に障害のある子どもや発達に遅れや偏りのある子どもの保育・教育の環境を含めて、就学前の子どもの保育・教育を取り巻く状況が大きく変わってきた。

このような状況を踏まえて、就学前の機関である保育所や幼稚園、あるいは児童発達支援に係わる事業者やセンター、さらには放課後等デイサービスなどにおける集団場面での指導に適用できるように、『インクルージョン保育を展開するための幼児・グループ指導カリキュラム—「遊び単元」中心の多層水準指導—』を全面的に見直し、2015(平成 27)年 11 月に、『インクルージョン保育のためのグループ指導カリキュラム—「遊びユニット」中心の多層水準指導—』を完成した。

本研究は、この最新版『インクルージョン保育のためのグループ指導カリキュラム—「遊びユニット」中心の多層水準指導—』を「みなみ栄保育園(千葉)」で活用した事例を報告するなかで、保育所での適用可能性について検討する。

## (方法)

### 1. カリキュラムの構成

『インクルージョン保育のためのグループ指導カリキュラム』は「グループ指導チェックリスト」、行動目標一覧表、解説書から構成され、「グループ指導チェックリスト」には「身辺自立」、「運動」、「認知」、「社会・情緒」、「言語・コミュニケーション」の 5 つの発達領域において、発達水準が 2 歳以前も含めて 6 歳までの総数 336 の行動目標が準備されている。

各発達領域はさらに 2~5 の下位領域に分けられる。発達領域「身辺自立」: 日常生活の流れの中で指導を行う「食事」、「衣服の着脱」、「健康・清潔」、「排泄」/ 発達領域「運動」: 身体全体を使う移動、走る、跳ぶ、投げる、ダンスや表現遊びなどの「粗大運動」と、目と手の供給が求められる手指を使う描画、はさみで切る、折り紙を折るなど遊びの中で指導を行う「微細運動」/ 発達領域「認知」: 事物の照合、弁別、比較や記憶などに関した「概念」や「読み・書き」、集団活動で起きるさまざまな出来事に対処する「問題解決」や「数」/ 発達領域「社会・情緒」: 集団活動の中で子ども同士や大人とのかかわり方に関する「人間関係」やさまざまな発達段階の「遊び」、感情のコントロールや自己表現に関する「情緒・自己概念」、集団生活の際の指示に従う行動や順番を待つなど「自己管理」、危険を避けたり、自分の身を守ったりする「安全・防衛」/ 発達領域「言語・コミュニケーション」: 集団活動の中で言葉の指示や質問の理解に関する「意味・理解」、発達段階に従って文法に則った言語行動を行う「表出・形式」、そして要求、伝達、質問、話し合いをするなどのコミュニケーション行動に関わる「内容・使用」、である。

## 2. アセスメント—指導—評価の循環過程

- (1)対象児全員に対して初回アセスメントを行う。
- (2)初回アセスメントの結果にもとづき、長期の指導計画(年間の目標設定、年間の指導計画など)及び短期の指導計画(個別の指導目標、月間、週間あるいは一日の指導計画(案)など)を立案する。
- (3)指導計画は、指導範囲から選び出した行動目標をもとに「遊びユニット」(日案)を作成して、指導を実践する。
- (4)指導の結果を記録し、担当保育士間で省察を行い、それをもとに次の指導計画を立て、「遊びユニット」を実践する。
- (5)アセスメントは、1年に3回(4月、9月、2月)実施し、個々の保育計画の成果(子どもの発達状態)を評価する。

## 3. 遊びユニットによる多層水準指導の指導—評価過程

多層水準指導により、障害のある子どもを含む発達水準が異なる子どもたちから成る集団に対して、全体に共通した目標の達成に向けた遊び活動を行いながら、一人ひとりの子どものニーズに応じた個別の目標や内容、方法により対応する。多層水準指導は「遊びユニット」中心に実践する。「遊びユニット」は子どもの自発的で主体的な遊び活動を基礎とし、臨機応変に変えられる柔軟な遊びを展開する。「遊びユニット」が終了したら、その「遊びユニット」に記載された行動目標や標的行動が達成したかどうかを、評価欄に記号で記入する。「遊びユニットの実践例」

- ①ボールで遊ぶ、②粘土で遊ぶ、③お面づくり、など  
(結果)

(1)障害のある子どもと障害のない子どもに、個別の環境を設定するのではなく、共通の環境のもとで共通の目標に向け、しかし発達の実態に応じた個別の遊び活動が、展開できた。

(2)グループに属する、発達が気になる子どもの特別な教育的ニーズに応じて、一人ひとりに個別に指導ができた。

(3)「グループ指導チェックリスト」を活用し、障害のない子どもも含めてすべての子どもに対し、個別の指導計画を作成する際に役に立った。

(4)「グループ指導チェックリスト」の行動目標を達成しようとする際に、適宜に応用行動分析の原理を適用するなかで、それを職員が学習し、子どもの行動問題に適切行動支援アプローチを試み、代替行動を学習させることができた。

## (考察・今後の課題)

従前は、障害のある子どもの指導計画を保育士が作成することはなかなか困難を伴ったが、「グループ指導チェックリスト」を活用することで、特別な教育的ニーズに応じた個別の指導計画を保育所においても作成し、子どもたちの発達の実態に応じた遊び活動を展開することも、可能になった。

2016(平成 28 年)年 1 月から障害者差別解消法が施行されているが、共生社会に向けてインクルージョン保育を推進していくためには、保育所においては人材の育成及び物理的な環境整備が急務である。今後は、対象児に標準化検査を実施するなど、このカリキュラムの臨床的妥当性を検討する。

(MINAMI hiroshi, SHIMIZU naoji, DOBASHI tomoko, FUKUMOTO midori)